

## フラゴナール《ぶらんこ》(1767年)における演劇的要素について

宮下 明日香 (関西学院大学)

---

フラゴナール (Jean Honoré Fragonard, 1732-1806) 作《ぶらんこ》(*Les hasards heureux de l'escarpolette ou L'escarpolette*, 1767) については、その図像解釈や、同じモチーフを描いた作品との比較を試みる先行研究などが多く存在する。演劇的要素に関しても、ミラムが《ぶらんこ》の庭園は人工的で舞台のようであり、少年が隠れている茂みは小道具のように見えると指摘している。また、フラゴナールと演劇関係者の交友についてはシュリフの言及があり、キュザンのレゾネでも交流関係が注文との関連で触れられている。とはいえ、いずれも経歴の一部として言及されているだけであり、本作品において演劇的要素が果たす役割を明確に説明できているとは言い難い。

本発表では、これらの諸要素のなかでもとくに舞台装飾との関連に着目する。具体的にはミラムが指摘していないモチーフに注目して、ここに描かれた「風景」が舞台装飾の書き割りのように描かれている可能性を指摘する。この指摘により、本作品における演劇的要素が果たす役割が更に明確になるのではなかろうか。

発表では、まずフラゴナールと演劇自体との結びつきについて再確認する。フラゴナールは当時オペラ座の踊り子として人気女優であったマリー=マドレーヌ・ギマール嬢と浮名を流しており、ショセ=ダンタン通りにあったギマール邸の装飾を一部行ったとされている。また、劇作家として知られるコレは本作品の注文経緯を日記に記していた。なお、画家は演劇に造詣が深いアルクール公爵とも親しく、彼のために6枚の幻想的肖像画を手掛けていた。さらに、彼が演劇関係者と交友関係を持っていただけでなく、演劇自体にも関心を向けていたことが分かる作品がある。それは《コレシュスとカリロエ》(*Coréus et Callirhoé*, 1765)である。ただし本発表ではこの作品にも見られる表情や情緒的表現のような演劇的要素よりも、舞台装置から生まれる視覚的な演劇的要素を考察することに重点を置く。

フラゴナールは風景素描をほとんど油彩画にしなかった。おそらく本作品も、実景に基づいて描かれたものではない。フランス演劇では17世紀から18世紀にかけて劇場は奥行がある細長い構造になっていた。この構造に合わせ、舞台上の書き割りをはじめとする舞台装置もその奥行に合わせて奥へ配置されていた。本作品においても書き割りを思わせるモチーフがある。それは、ブランコの右側に存在する木である。この木の描写は、私たちがこの場面を目の前で起きた出来事としてのぞき見していることを強調するために、書き割りのように描かれているのではなかろうか。その結果、私たちは《ぶ

らんこ》に描かれた劇的なシーンを1人の鑑賞者として観ているような気分になれるのである。